

魚釣島・南小島・北小島での日本政府 の利用開発可能性調査のあらまし —魚釣島・南北小島はどんな島なのか— (2)

藤田 宗久
(旧沖縄開発庁総務局企画課企画専門官)

はじめに

前号に書いた通り、1979年5月24日(木)08:00に仮ヘリポートの建設及び自動気象計の設置作業に従事した「先発調査隊」8名を乗せた巡視船「そうや」が那覇の安謝新港に帰り、5月25日には閣議後の記者会見で、沖縄開発庁長官が「尖閣諸島利用開発可能性調査の内容・調査日程等について」の発表を行った。那覇の安謝新港に係留された「そうや」は、僅か2日間のつかの間の休息を取り、5月26日朝からは本調査隊への便宜供与に取りかかった。

1 現地調査期間中のスケジュール(実績)第1日

1979年5月26日(土) 天候(那覇)曇り。

設営・移動等	ボーリング	学術調査	測量	その他(救急・補給)
安謝新港にて朝から「そうや」に資機材14トン積み込み、調査団員17名及びプレス3名も「そうや」に乗船し、16:00出航。プレス10名が「おきなわ」に乗船し、13:00那覇港を出航。				

5月26日(土)朝から安謝新港で「そうや」に大型クレーンなどを使用して本調査隊の資機材約14トンを積み込んだ。ただし、この日の朝、安謝新港に届いた本調査隊の資機材は、事前に第11管区海上保安本部に届けていた約11トンから更に約3トン増加していた。増加の原因は、主として学術調査班のグラスファイバー製ボートなどの資機材の追加によるものだった。海上保安庁からは、資機材の抑制・軽量化を厳しく言われていたため、ボーリング資機材、発電機などについても、極力、軽量なものとする努力はしていた。結局、この朝、第11管区海上保安本

部の要請で、筆者が海上保安庁本庁政務課と連絡を取り、改めて報告と要請を行って、「そうや」への積込みを何とか全量承認して貰った。荷物が増えれば、現地での荷下ろし作業等が増え、ヘリコプターの運航回数も増加し、ひいては、ヘリコプターの法定点検との関係で難しい問題にもなりかねない、非常に大事なことであった。

13:00に同行するプレス10名が乗船の巡視船「おきなわ(360トン)」が那覇港を出航し、魚釣島西岸海域に向かった。16:00に「そうや」が安謝新港から魚釣島西岸海域に向けて出航した。「そうや」には、資機材のほか、本調査隊17名とプレス3名が乗船した。「そうや」船内では、出航後すぐに、本調査隊の主要メンバーと「そうや」の便宜供与担当者との打合せが始まった。主たるテーマは、①荷物増量に伴う現地での輸送計画の変更、②通信連絡の件であった。現地での輸送計画の変更など、課題が多くて、打ち合わせは深夜に及んだ。この夜の打合せでの最重点は、現地到着直後のボーリング資機材の輸送にあった。ボーリング資機材は本体だけでも一式300kg、形もいびつでありボーリング機材を囲う運搬用の木材の重量を合わせると300kgをかなり超過した。また、地下水を調査するのが主目的であったため、なるべく山沿いで掘削をしたかった。気流が不安定になり、気温の高い尖閣諸島ではヘリコプターのエンジンの馬力が出ないためもあり、パイロットの操縦も難しくなるので、その調整も大変だった。

2 現地調査期間中のスケジュール(実績)第2日

1979年5月27日(日) 天候(尖閣) 風雨強し。

設営・移動等	ボーリング	学術調査	測量	その他(救急・補給)
「そうや」及び「おきなわ」が早朝に魚釣島沖に到着。風雨あり、波浪高し。13:00頃まで待ったが、上陸不可能で1日延期を決定。「そうや」、「おきなわ」とも、魚釣島及び南・北小島周辺海域を巡視し続けた。13:00頃Y新聞社ヘリが飛来し、仮ヘリポートに着陸後、帰還。				

5月27日(日)「そうや」及び「おきなわ」は、早朝に、尖閣諸島海域に到着した。朝07:00前に起床。小雨、北東の風強し。08:30上陸作業開始予定も、荒天が収まらず「そうや」の船長の判断で、上陸延期を決定。プレス10名を乗せた「おきなわ」も、小型船舶でもあり、木

の葉のように揺れながら「そうや」の近くの海域で待機した。「そうや」、「おきなわ」は、昼間は魚釣島、南小島、北小島の3島の周辺をぐるぐると廻り、夜間は安全のため、魚釣島を背景にして風を避ける位置で漂泊していた。結局、13:00頃まで待ったが上陸不可能なままだったので、「そうや」の船長の判断で上陸をまる1日遅らせることとした。

筆者は、明日の天候も分からなくて前途を危惧したが、明日は何としても魚釣島に上陸したいと願っていた。5月27日(日)夕刻、学術調査班12名及び同行のプレス関係者18名は、巡視船「さつま」で石垣港を出航した。この学術調査班12名は、ベースキャンプの設営など、受け入れ態勢が整った後、調査団本隊よりも1日遅れで、5月28日(月)に魚釣島に上陸の予定だった。結果的には、調査団本隊の魚釣島西岸への上陸がまる1日遅れたので、「そうや」、「おきなわ」、「さつま」乗船の調査団員及びプレス関係者(合計60名)は、28日に同時に魚釣島西岸に上陸した。

3 現地調査期間中のスケジュール(実績) 第3日

1979年5月28日(月) 天候(尖閣) 早朝は曇り、日中は曇り時々小雨。

設営・移動等	ボーリング	学術調査	測量	その他(救急・補給)
08:00から「そうや」ヘリにて偵察飛行。ときどき小雨がぱらついたが、魚釣島西岸の足場は良さそうだったので上陸を決定。同時にボーリングB1(魚釣島西岸)とB2(同東岸)地点を選定。魚釣島西岸のC1ベースキャンプを設営。08:50~17:10「そうや」ヘリにてC1への資機材輸送。「そうや」ヘリ39便7.5トン、人員20名(うちプレス3名)。09:00から、「おきなわ」のプレス10名と前夜、石垣港を発った「さつま」乗船の調査団員12名及びプレス18名が、それぞれの救命艇で上陸。15:00石垣航空基地ヘリにて調査団員2名(NO2及びNO5)及び地主側立会人2名が上陸。				

5月28日(月)朝 雨はほとんど止み、波浪もほぼ収まった。08:00「そうや」の乗組員及び筆者ら本調査隊の主要なメンバー計4名が、「そうや」ヘリにて魚釣島の西岸及び東岸の偵察飛行を行った。時々、小雨がぱらついたが足場は良さそうだった。偵察隊の報告を聞いて、「そうや」の船長が上陸を決定した。同時に、ボーリングB1地点(魚釣島西岸)とB2地点(魚釣島東岸)を決定し、関連の資機材はその近くに降ろすこととした。08:50頃から「そうや」搭載の資機材、人員の輸送を開始し

た。09:00すぎからC1ベースキャンプの設営に取りかかった。まずは、昔の鯉節工場従業員住居跡の平坦地に住居、集会所、炊事場用のテント12張を張り、谷川の水をホースで炊事場まで引き、さらに、キャンプ地から100m前後離れた海岸にも比較的近い平坦地に「木造のトイレ」を組み立てることであったが、いずれも受託コンサルタント会社の準備がよく、作業は円滑に進んだ。谷川の水が予想したよりも豊富で、雨後にもかかわらず、濁りが少なかった。この谷川の水は、前年から時々上陸していた政治結社の隊員も飲食に利用した形跡があり、また、先発隊も飲食に利用したので、本調査隊も検査なしで、飲食に利用した(谷川の水質による問題は起きなかったが、本調査隊の調査結果では大腸菌群数などが極めて多いという結果が出た。次回上陸からは、飲食用には使用しなかった)。

魚釣島西岸のC1ベースキャンプ



ベースキャンプの全景。本来は草がぼうぼうと生えているが、当時は、政治結社が不法占拠していたため、昔のカツオ節工場や従業員宿舎があったこの辺もきれいに維持されていた。

本調査の1年後に行った時は、草ぼうぼうだった。

「木造トイレ」は、沖縄本島で製造したものを解体して持参したもので、1時間程度で組み立てが終わり、2室のWCが整備された。トイレには便器はなかったが、使用した跡には海砂を掛けて臭いや虫などの発生を

防ぎ、手水にはすぐ近くの「水溜まり」を使用した。昼過ぎまでにはベースキャンプの設営等が終わり、「そうや」甲板で資機材の積み出しを手伝っていた調査団員10名も上陸し、午後からは、調査活動を開始した。同行のプレス関係者31名も10:00頃までには全員が魚釣島西岸に上陸したので、幹事会社の共同通信社がプレス関係者全員を水路(港)の傍に集めた。そこで、調査団のリーダーである筆者が本調査の内容、調査方法などを詳しく説明した(この場面が、NHKのニュースで何度も放映された)。

魚釣島西岸のトイレ



ベースキャンプの近くには、予め作って持参したトイレを組み立てた。便器はなく、穴に落としてその都度、砂をかけた。雨風が凌げる立派なトイレだった。2室あったので同時に2名が使用できた。(このトイレを始め、無人島での業務及び大勢のキャンプ生活に必要な資機材について、受託会社のパシフィックコンサルタント kk には、完璧に準備していただき感謝だった。)

筆者の説明は、前掲の5月25日の沖縄開発庁長官発表資料をプレス関係者に配布して行った。次に、観測を始めていた小高い丘の上に設置された自動気象計のところにプレス関係者を案内し、自動気象計の蓋を開けてその中身等についても説明した。その後、魚釣島西岸のボーリング地点 B1 に案内して説明をした。最後に、水路での「検潮器設置作業」

を取材用の写真撮影のために4回繰り返した。プレス関係者は昼食を挟んで自由に取材活動を行った。NO8 地上地質班の学者、NO12 陸上生物班の学者がプレスのインタビューを受けた。NO12 は早速、大岩の下に頭をつつこんでいた長さ2mの臭蛇(シュウダ)を捕獲してプレスに披露していた。

臭蛇(シュウダ)



陸上生物調査班の琉球大学助教授が大岩の下に隠れていた臭蛇(シュウダ)を引っ張り出して捕獲した。

2m前後ある大物で、力が強く、助教授は指を噛まれて出血していた。毒はない。捕獲した蛇はホルマリン漬けたが、10匹は生きてままで那覇(琉球大)に持ち帰った。蛇の持ち帰りについて「そうや」が難色を示し、説得するが大変だった。蛇を袋に入れたまま木の箱に入れ、寝ずの番を付けることで了解してもらった。(「そうや」では、「以前、蛇が複雑な機関室に入り込んで捕獲するのが大変だった。」そうである。)

資料1：臭蛇(シュウダ)

魚釣島にはハブはいないと言われていたが、万一を考えて、巡視船「そうや」の冷蔵庫には「血清」を用意した。実際、ハブはいなかったが、悪臭で敵を追い払うという「臭蛇(シュウダ)」がかなりの数いた。大きなものは直径10cm、長さ2mもあった。撤収が決まった後、筆者は魚釣島の最高峰362mに単独登頂したが、帰途、道脇でとぐろを巻いて飛びかかるような姿の大きなシュウダに出会った。思わず、大きな石を拾って投げたが、かすった程度でシュウダは